

行政視察報告書

- 1 日時:平成27年7月14日(火)～7月16日(木)
- 2 視察者:市民フォーラム(山本議員、中原議員、林議員)
- 3 視察市:青森市、函館市

(青森市)

視察項目 ・コンパクトシティのまちづくりについて
・中心市街地活性化について

視察担当課:青森市都市整備部都市政策課

青森市経済部商店街振興課

コンパクトシティの取り組みについてですが、効率的かつ効果的なまちづくりをしていくには、コンパクトシティという考え方は重要であり、また中心市街地を活性化させることにより、活気を全体に波及させていくことがまちづくりを考える上で重要である。

まちづくりを計画するにあたり、都市形成の変遷を見ていくことが不可欠であることから、まずは青森市の概要や都市計画の歴史について比較してみる。青森市も呉市と同様、市町村合併を繰り返し、市域を拡大してきた。直近では、平成大合併に伴い、浪岡町を合併し、人口30万人を超えたことから、全国37番目の中核市に移行している。

都市計画については、新都市計画法施行に伴い、線引きをし、当初の市街化区域は約3,760haでしたが、段階的に拡大し、現在は4,991haとなっている。

このような市街地拡大に伴い、当然ながら多大な行政投資を余儀なくされている。また、日本有数の豪雪地域であることから、市街地の拡大した結果、毎年、約20億が除雪費が計上されており、毎年、小学校が1校建てられる費用が除雪費用に費やされ

ている。ちなみに、昨年度の青森市の除排雪実施延長は車道約 1,300km で、直線にすると青森市から広島までの距離に相当する。

そこで、青森市は、増大する行政コストの削減のため、都市計画マスタープラン(平成 11 年策定)において「①市街地の拡大に伴う新たな行財政需要の抑制」「②過去のストックを有効活用した効率的で効果的な都市整備」「③市街地の周辺に広がる自然・農業環境との調和を目指したコンパクトシティの形成」を都市づくりの基本理念に掲げ、都市整備を進めた。この時に、初めて「コンパクトシティ」という言葉を明文化したとのこと。

具体的には、「①機能的で効率的な土地利用誘導」「②おのこの拠点の役割分担の下での重点拠点整備」「③公共交通を基本とする交通体系の確立」を主軸に置き、土地利用では、市内を「インナー」、「ミッド」、「アウター」の3ゾーンに分類し、各ゾーンごとに交通体系の整備方針を定め、まちづくりを進めている。原則、「アウター」と位置づけられたゾーンでは開発を行わず、学術、芸術、文化活動や、自然を楽しむレクリエーションエリアとして維持している。

呉市においても、青森市の政策を参考にし、長期期間の視点で将来の市のビジョンを作成し、それに基づいて、行政が住居地エリア、商業エリアを誘導して、まちを形成し、行政コストの削減、市民の満足度の向上を同時に図っていく事が、これから必要となって行くことと思います。

決して間違っはいけないことは、強制的に一点にものを集めるのではなく、多極的に誘導し、効率的に公共交通を基本とする交通体系を繋げていくような、まちづくりを進めていかななくてはならないということ。

また、中心市街地の活性化策についてですが、平成 23 年 1 月に「ねぶたの家ワ・ラッセ(文化観光交流施設整備事業)」のオープン、平成 21 年 3 月に「まちなか温泉・センターホテル(まちなかホット・ぶらっと推進事業)」を開業するといったハード整備と

ともに、青森市の持つ「食」「歴史」「芸術」等の現地資源を活かし、青森ならではの魅力づくりを通じて、にぎわい創出と地域経済の活性化を図っています。具体的には、市民の台所である「古川市場」でどんぶりご飯に、市場内で販売しておる新鮮な刺身をお好みでのせたオリジナル丼を食べられる「のつけ丼」を平成21年から実施している。自分も朝食として食べてきましたが、非常に美味しく面白い取り組みだと思います。

注文の方法は、チケット制になっており、最初に1000円分のチケットを買い、どんぶりにご飯を入れてもらいます。(大盛り200円・普通100円)そして、各店舗を廻り、好きな食材をのせていきます。値段は基本100円ですが、イクラや中トロなどの高級食材は200円とか少し高めの値段設定になっています。最初は若干高いという印象を受けましたが、1000円分を全て使い切った自分だけの「のつけ丼」を見ましたら、これだけのボリュームのものを1000円で食べられるというのはかなりのお得感があると思います。

呉市においても、大和ミュージアムや海自カレーといった、見る、食べる観光はありますが、青森市のまちなか温泉・センターホテルのような宿泊を伴うものが呉市にもあれば、なお一層観光事業に弾みがつくものと思います。

また、他市の参考にできる取り組み、アイデアは積極的に取り入れ、呉市の活性化を図っていきたいと思います。

(函館市)

視察項目 ・6次産業化による道南地域づくり活動について

視察担当課 公益財団法人 函館地域産業振興財団

北海道立工業技術センター 研究開発部

はじめに、道南食と観光クラスター型6次産業化推進協議会とは、道南地域の特産品である、がごめ昆布を活かした商品開発や体験型観光プログラムの開発支援に取り組む協議会である。

がごめ昆布は、昆布の養殖の際に邪魔になる海藻で、収穫しても廃棄していた。しかし、北海道大学の研究の中で、がごめ昆布には、有益な成分が多く含まれており、特にネバネバに含まれる成分は、水溶性粘性多糖類のアルギン酸、ラミナラン、フコイダン、海藻油のフコキサンチン、各種ミネラルなどであり、健康や美容に関わる成分が豊富であることが分かり、商品化することが決定した。

がごめ昆布の商品として売り出す取り組みとしては、がごめ昆布関連の商品を販売する関係会社39社で構成する函館がごめ連合と、がごめ昆布の地域ブランド化・販売促進及び道南地域の特産品を扱うアンテナショップを運営するフードカン、この2つの担い手に対し、専門的な知見を有している大学、販路開拓のバイヤー、商品開発にかかる料理専門家、デザイナー、など、各方面へ円滑な橋渡しとして活躍している。

また、新たな取り組みとして、がごめ昆布のしゃぶしゃぶという新しい食べ方を提案し、「函館がごめしゃぶしゃぶ」が誕生させた。さらに、がごめ昆布の収穫現場と加工場の体験ツアーを実施し、ノウハウを構築させた。

次の目標として、平成28年3月の新幹線開通に伴い、新しくできる駅周辺の地域の

品目を取り入れ、対象地域・品目を拡大し、地域資源を活用した商品開発・販路拡大に継続して取り組むこととしている。

今回のがごめ昆布の商品開発及び販売の成功の理由として、

1 統一ロゴマークの使用

担い手の活動の広報及びプロモーションを支援するにあたり、ウェブサイト「美食風土記」を開設するとともに、ロゴマークを作成した。このロゴマークは、活動を行う際に必ず使用することとしており、活動の統一が図られることにつながっている。

2 マスコミの積極的な活用

取組を行うにあたり、積極的に新聞社や、テレビ局に働きかけ、新聞、テレビ等のメディアを通じて情報を広く発信した。ホテルの朝食で海藻料理を提供する「函館の朝食に海藻を」、がごめ料理を食べ歩く「がごメニュー食べ歩き」などのイベントについても、新聞で取りあげてもらうことにより、多くの人の関心を得ることができた。費用をかけることなく、マスコミを活用したPRを行うことで、がごめ昆布を通じた6次産業化への貢献の取組が年々広く知られることとなった。

3 強力なバックアップと協議会自身の成長

連携を行った北海道大学、北洋銀行、渡島総合振興局それぞれの専門性を活かした強力なバックアップがあったことが、大きな特徴と言える。特に北洋銀行は販路開拓の専門家のネットワークを有していることから、道内外(特に青森)へのバイヤーに商品をPRすることができ、新幹線開業を見据えた青函連携の足がかりにもなった。

また、専門家のアドバイスを担い手と一緒に協議会自身も勉強することができたことから、構成主体それぞれの強みを活かした連携が、協議会自身の成長にもつながった。

以上のことから、呉市においても、現在、廃棄されているものが、商品に変わる可能性を秘めており、それらを如何に生かし、また、大学や企業と一体となって取り組ん

でいくか。例えば、有害鳥獣となっているイノシシや等、マイナスの要因をプラスに変えることが、これからの呉市において重要であると思います。

(函館市)

視察項目 市立函館博物館 施設見学

昭和 41 年、函館公園内に総合博物館として開館し、自然科学から考古学、美術工芸、歴史、民俗などに関する資料が多数収蔵・展示されている。

縄文時代から現代までの函館の歴史について学ぶことができ、なかでも国指定重要文化財で日本最大量を誇る中世の「志海苔古銭」や開拓使函館仮博物場内で使用されていた日本最古の展示ケースなど、貴重なものが展示されていた。考古資料、美術工芸資料、ペリー来航、箱館戦争、函館大火に関する歴史資料、民俗資料、自然科学の分野では、地質・鉱物・化石資料のほかに、北海道内外の動植物資料の収蔵・展示と、バラエティ豊かなものであった。

呉市では、海軍に関する資料は多く展示があるが、縄文時代のものや動植物の資料を見かけることは少ないため、様々な角度からの資料館があってもいいのではないかと思う。